

芥川龍之介全集

第二卷

昭和三年一月二十五日印刷
昭和三年一月三十日發行

芥川龍之介全集第二卷

著 者 芥 川 龍 之 介

東京市神田區南神保町十六番地

發 行 者 岩 波 茂 雄

東京市本所區番場町四番地

印 刷 者 守 岡 功

東京市本所區番場町四番地

印 刷 所 凸版印刷株式會社本所分工場

東京市神田區南神保町十六番地

發 行 所 岩 波 書 店

電話 (33) 二二〇八番 二二〇九番 二二八二番
九段 (33) 二二〇八番 二二〇九番 二二八二番
振替口座東京七四四一六番

第二卷目錄

邪宗門	起	一頁
毛利先生	起	八三頁
あの頃の自分の事	起	一〇九頁
開化の良人	起	一三九頁
犬と笛	起	一六九頁
きりしとほろ上人傳	起	一八九頁
蜜柑	起	二一五頁
沼地	起	二二三頁
龍	起	二二九頁
疑惑	起	二四九頁
路上	起	二七三頁

じゆりあの吉助

起三七三頁

魔術

起三八一頁

葱

起三九九頁

舞踏會

起四一七頁

鼠小僧次郎吉

起四三一頁

秋

起四五九頁

黑衣聖母

起四八三頁

或敵打の話

起四九五頁

女

起五一五頁

南京の基督

起五二三頁

杜子春

起五四七頁

捨兒

起五六九頁

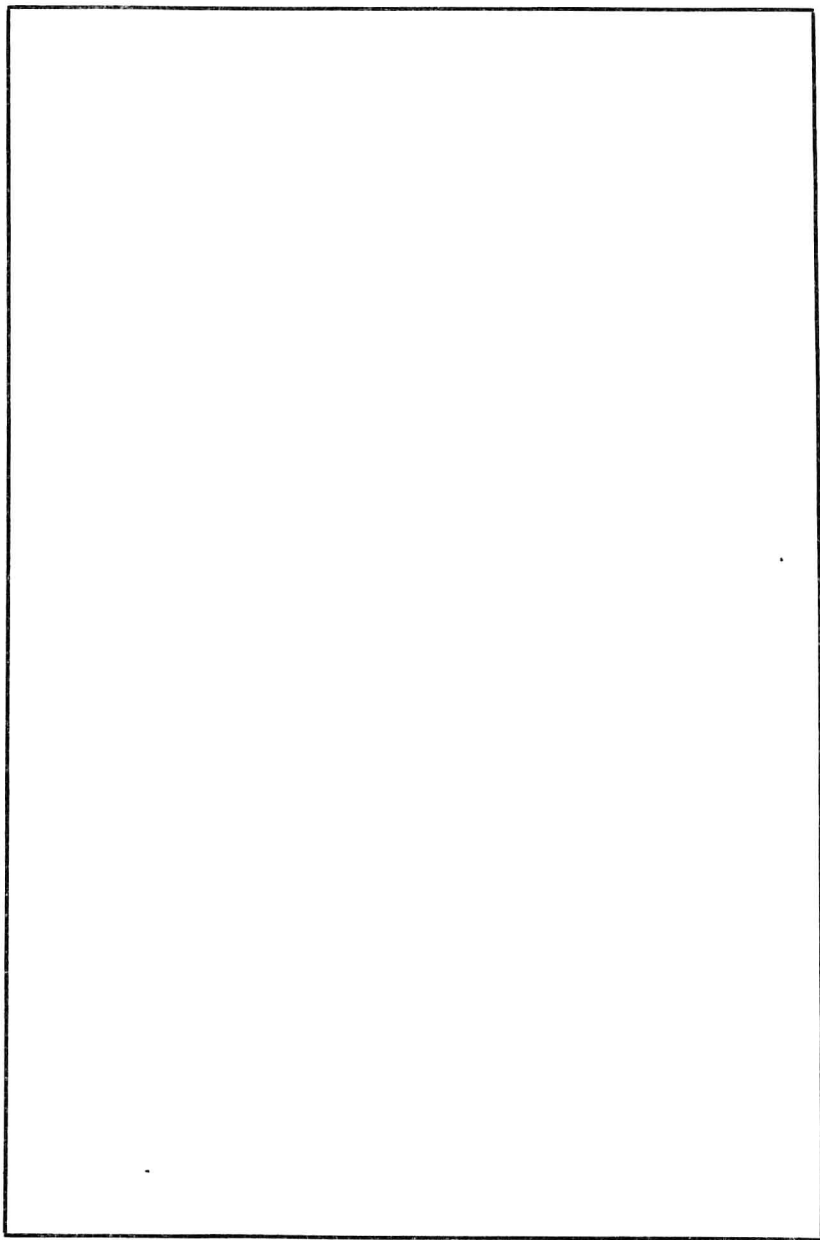
影

起五八一頁

お律と子等と

起六〇七頁

邪宗門



—
先頃大殿様御一代中で、一番人目を駭かせた、地獄變の屏風の由來を申し上げましたから、今度は若殿様の御生涯で、たつた一度の不思議な出来事を御話し致さうかと存じて居ります。が、その前に一通り、思ひもよらない急な御病氣で、大殿様が御薨去になつた時の事を、あらまし申し上げて置きませう。

あれは確、若殿様の十九の御年だつたかと存じます。思ひもよらない急な御病氣とは云ふものの、實は彼はその半年ばかり前から、御屋形の空へ星が流れますやら、御庭の紅梅が時ならず一度に花を開きますやら、御廐の白馬が一夜の内に黒くなりますやら、御池の水が見る間に干上つて、鯉や鰯が泥の中で喘ぎますやら、いろいろ凶い兆がございました。中でも殊に空恐ろしく思はれたのは、或女房の夢枕に、良秀の娘の乗つたやうな、炎々と火の燃えしきる車が一輛、人面の獸に曳かれながら、天から下りて來たと思ひますと、その車の中からやさしい聲がして、「大殿様をこれへ御迎へ申せ。」と、呼はつたさうでございます。その時、その人面の獸が怪しく唸つて、

頭を上げたのを眺めますと、夢現の暗の中にも、屑ばかりが生々しく赤かつたので、思はず金切聲をあげながら、その聲でやつと我に返りましたが、總身はびつしより冷汗で、胸さへまるで早鐘をつくやうに躍つてゐたとか申しました。でございますから、北の方を始め、私どもまで心を痛めて、御屋形の門々に陰陽師の護符も貼りましたし、有驗の法師たちを御召しになつて、種々の御祈禱も御上げになりましたが、これも誠に遁れ難い定業でもございましたらう。

或日——それも雪もよひの、底冷がする日の事でございましたが、今出川の大納言様の御屋形から、御歸りになる御車の中で、急に大熱が御發しになり、御歸館遊ばした時分には、もう唯「あた、あた」と仰有るばかり、あまつさへ御身のうちは、一面に氣味悪く紫立つて、御褥の白綾も焦げるかと思ふ御氣色になりました。元よりこの時も御枕もとには、法師、醫師、陰陽師などが、皆それぞれに肝膽を砕いて、必死の力を盡しましたが、御熱は益烈しくなつて、やがて御床の上まで轉び出ていらつしやると、忽ち別人のやうな嘎れた御聲で「あおう、身のうちに火がついたわ。この煙りは如何致した。」と、狂はしく御吼りになつた儘、僅三時ばかりの間に、何とも申し上げる語もない、無残な御最後でございます。その時の悲しさ、恐ろしさ、勿體なさ——今になつて考へましても、都に迷つてゐる、護摩の煙と、右往左往に泣き惑つてゐる女房たちの袴の

紅とが、あの茫然とした驗者や術師たちの姿と一しよに、ありありと眼に浮かんで、かいつまんだ御話を致すのさへ、涙が先に立つて仕方がございません。が、さう云ふ思ひ出の内でも、あの御年若な若殿様が、少しも取亂した御容子を御見せにならず、唯、青ざめた御顔を曇らせながら、ちつと大殿様の御枕元へ坐つていらした事を考へると、何故かまるで磨ぎすました焼刃の匂ひでも嗅ぐやうな、身にしみて、ひやりとする、それでゐてやはり頼もしい、妙な心もちが致すのでございます。

二

御親子の間からでありながら、大殿様と若殿様との間位、御容子から御性質まで、うらうへなのも稀でございませう。大殿様は御承知の通り、大兵肥満でいらつしやいます。が、若殿様は中背の、どちらかと申せば瘦ぎすな御生れ立ちで、御容貌も大殿様のどこまでも男らしい、神將のやうな倅とは、似もつかない御優しさでございます。これはあの御美しい北の方に、瓜二つとでも申しませうか。眉の迫つた、眼の涼しい、心もち口もとに癖のある、女のやうな御顔立ちでございましたが、どこかそこにうす暗い、沈んだ影がひそんでゐて、殊に御装束でも召しますと、御

立派と申しますより、殆神寂てゐるとでも申し上げたい位、如何にももの靜な御威光がございました。

が、大殿様と若殿様とが、取り分け違つていらしたの、どちらかと云へば、御氣象の方で、大殿様のなさる事は、すべてが豪放で、雄大で、何でも人目を驚かさなければ止まないと云ふ御勢ひでございましたが、若殿様の御好みは、どこまでも繊細で、亦どこまでも優雅な趣がございましたやうに存じて居ります。たとへば大殿様の御心もちが、あの堀川の御所に窺はれます通り、若殿様が若王子に御造りになつた龍田の院は、御規模こそ小さうございますが、萱相丞の御歌をそのまゝな、紅葉ばかりの御庭と申し、その御庭を縫つてゐる、清らかな一すちの流れと申し、或は又その流れへ御放しになつた、何羽とも知れない白鷺と申し、一つとして若殿様の奥床しい思召しの程が、現れてゐないものはございません。

さう云ふ次第でございますから、大殿様は何かにつけて、武張つた事を御好みになりましたが、若殿様は又詩歌管絃を何よりも御喜びなさいまして、その道々の名人上手とは、御身分の上下も御忘れになつたやうな、隔てない御つき合ひがございました。いや、それも唯、さう云ふものが御好きだつたと申すばかりでなく、御自分も永年御心を諸藝の奥祕に御潜めになつたので、笙こ

そ御吹きになりませんでした、あの名高い帥民部卿以來、三舟に乗るものは、若殿様御一人であらうなどと、噂のあつた程でございます。でございますから、御家の集にも、若殿様の秀句や名歌が、今に澤山残つて居りますが、中でも世上に評判が高かつたのは、あの良秀が五趣生死の圖を描いた龍蓋寺の佛事の節、二人の唐人の間答を御聞きになつて、御詠みになつた歌でございます。これはその時、聲の模様に、八葉の蓮華を挾んで二羽の孔雀が鑄つけてあつたのを、その唐人たちが眺めながら、「捨身惜花思」と云ふ一人の聲の下から、もう一人が「打不立有鳥」と答へました——その意味合ひが解せないのです、そこに居合はせた人々が、兎角の詮議立てをして居りますと、それを御聞きになつた若殿様が、御持ちになつた扇の裏へさらさらと美しく書き流して、その人々のゐる中へ御遣しになつた歌でございます。

身をすてて花を惜しと思ふらむ打てども立たぬ鳥もありけり。

三

大殿様と若殿様とは、かやうに萬事がかけ離れていらつしやいましたから、それだけ又御二方の御仲にも、そぐはない所があつたやうでございます。これにも世間には兎角の噂がございますし

て、中には御親子で、同じ宮腹の女房を御争ひになつたからだなどと、申すものもございしますが、元よりそのやうな莫迦げた事があらう筈はございません。何でも私の覺えて居ります限りでは、若殿様が十五六の御年に、もう御二方の間には、御不和の芽がふいてゐたやうに御見受け申しました。これは前にもちよいと申し上げて置きました、若殿様が筈だけは御吹きにならないと云ふ、その謂はれに縁のある事なのでございます。

その頃、若殿様は大さう筈を御好みで、遠縁の從兄に御當りなさる中御門の少納言に、御弟子入をなすつていらつしやいました。この少納言は、伽陵と云ふ名高い筈と、大食調入食調の譜とを、代々御家に御傳へになつていらつしやる、その道でも稀代の名人だつたのでございます。

若殿様はこの少納言の御手許で、長らく切磋琢磨の功を御積みになりましたが、さてその大食調入食調の傳授を御望みになりますと、少納言はどう思召したのか、この仰せばかりは御聞き入れになりません。それが再三押して御頼みになつても、やはり御満足の行くやうな御返事がなかつたので、御年若な若殿様は、一方ならず残念に思召したのでございませう。或日大殿様の双六の御相手をなすつていらつしやる時に、ふとその御不満を御洩しになりました。すると大殿様は何時ものやうに鷹揚に御笑ひになりながら、「さう不平は云はぬものぢや。やがてはその譜も手に

はひる時節じせうがあるであらう。」と、やさしく御慰おだぐさめになつたさうでございます。所ところがそれから半月はんつきとたたない或日あるひの事、中御門なかつかどの少納言せうなごんは、堀川ほりかはの御屋形おやかたの饗さかへ御出おいでになつた歸かへりに、俄にわかに血ちを吐はいて御歿おなりになつてしまひました。が、それは先まづ、よろしいと致いたしましても、その明あくる日ひ、若殿様わかとのさまが何氣なにげなく御居間おゐまへ御出おいでになると、螺鈿らでんを鏤ちりはめた御机おつくゑの上に、あの伽陵がりやうの笙しやうと大食調だいじきてう入ふ食調じきてうの譜ふとが、誰たれが持つて來たともなく、ちやんと載のつてゐたと申まをすではございせんか。

その後又大殿様のちまたおほのさまが若殿様わかあさまを御相手おあひてに双六すごろくを御打おちになつた時とき、

「この頃は笙しやうも一段と上達じやうたつしたであらうな。」と、念ねんを押おすやうに仰有おつしやると、若殿様わかとのさまは靜しづかに盤面はんめんを御眺おながめになつた儘まま、

「いや笙しやうはもう一生いっしやう、吹ふかない事に致いたしました。」と、冷ひやかに御答おこたへになりました。

「何なんとして又また、吹ふかぬ事に致いたしたな。」

「聊いさかながら、少納言せうなごんの菩提ぼだいを弔とむらはうと存ぞんじますから。」

かう仰有おつしやつて若殿様わかとのさまは、ちつと父上ちやうへの御顔おかほを御見おみつめになりました。が、大殿様おほのさまはまるでその御聲おこゑが聞きえないやうに勢いきほひよく筒つつを振ふりながら、

「今度こんどもこの方はうが無地勝むぢがちらしいぞ。」とさりげない容子ようすで勝負しやうぶを御續おつづけになりました。でございま

すからこの御問答は、それぎり立ち消えになつてしまひましたが、御親子の御仲には、この時から或面白くない心もちが、挟まるやうになつたかと存せられます。

四

それから大殿様の御隠れになる時まで、御親子の間には、まるで二羽の蒼鷹が、互に相手を窺ひながら、空を飛びめぐつてゐるやうな、ちつとの隙もない睨み合ひがずっと續いて居りました。が、前にも申し上げました通り若殿様は、すべて喧嘩口論の類が、大御嫌ひでございましたから、大殿様の御所業に向つても、楯を御つきになどなつた事は、殆ど一度もございません。唯、その度に皮肉な御微笑を、あの癖のある御口元にちらりと御浮べになりながら、一言二言鋭い御批判を御漏らしになるばかりでございます。

何時ぞや大殿様が、二條大宮の百鬼夜行に御遇ひになつても、格別御障りのなかつた事が、洛中洛外の大評判になりますと、若殿様は私に御向ひになりました、

「鬼神が鬼神に遇うたのぢや。父上の御身に害がなかつたのは、不思議もない。」と、さも可笑しさうに仰有いましたが、その後又、東三條の河原院で、夜な夜な現れる融の左大臣の亡靈を、大